慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	オットー・ コンラッド著 経済学の死罪
Sub Title	
Author	気賀, 健三
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1935
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.29, No.6 (1935. 6) ,p.869(123)- 873(127)
JaLC DOI	10.14991/001.19350601-0123
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19350601-0123

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

カンの農業略圖』並びに一千八百十九年の『經濟學新原理』初版の表題頁を寫眞版として挿入することゝした。

オットー・コンラッド著「經濟學の死罪」

氣賀健三

現代の理論經濟學界は何人でも指摘する通り、立場をそれ〴〵異にする多數の學者が、或は新說の提唱に於て、或は舊說の修正なり改革なりに於て互に異なつた意見を樹立して居つて、支配的と認められる程の有力な學說は容易に之を見出し難い狀態に在る。茲に紹介するコンラッドも亦、學界に新說を提出して從來の經濟學說の改革に資せんことを期した者の一人である。

其序文に記す所に依れば、彼は從來經濟學の進步を妨げて居た重大なる誤謬から之を救はうと試みたのである。重大なる誤謬とは、勞働、土地及び資本の三生產要素論であつて、コンラッドに依れば、從來經濟學の知識が爾餘の學問程一般的に普及しないのは實に一つには之が爲であり、其結果は更に實際的經濟政策に對してすら殆ど影響を及すを得ざる狀態を齎らしたのである。

コンラッドは先づ第一に經濟の意義を明にする。彼が力を强めて說く所は、經濟が人間の行爲であるといふこと、然かも欲望滿足の爲にする行爲であるといふことである。而して欲望滿足の爲に外界の手段を必要とする場合、此手段をば經濟の對象と呼ぶ。之に對して人間は經濟の主體である。外界の手段即ち財貨の生產使用を爲すものは飽

くまでも人間であり、財貨は、土地でも資本でも總て皆人間の支配を受ける「經濟の對象」に過ぎない。

斯る解釋は如何なる結論を生むかといふに、財貨の生産に於て生産的給付を爲すものは其生産に參加せる人間の行爲即ち勞働のみであつて、一般の生産三要素説に於て考へらるゝ如き、其生産に必要なる土地及び資本は何等給付を爲すものでは無いといふのである。蓋し「生産とは一つの行爲であり、生命なき生産手段は行爲を演ずることが出來ず、從つて又何等の生産給付を果すことが出來ぬからである」と。

而して、土地及び資本の所有者が、其所有に依つて獲得する所の地代及び利子は此等の生産要素の生産的給付に對する報償でも無ければ、又代價でも無く、それ〴〵の所有者が其利用を許可する其許可に對して支拂はれる價格なのである。報償でないといふ點に於ては勞働賃銀も同樣である。賃銀とは勞働なる生産的給付に對する價格であるのである。賃銀、地代、利子それ〴〵が報償でなく價格であるといふことはコンラッドの大に力説する所で、三要素説は之を報償と見るの誤を犯せる點に於て其罪萬死に値すと斷ずる。

コンラッドに據れば、三生産要素説は資本と土地とを人格化、又は勞働を物體化するものであり、此三要素が經濟上同等の資格に於て生産的給付を爲し、其給付の效果に對する報償として、それ〴〵賃銀・利子及び地代が其所有者の掌中に受領せられると説明するものである。而して斯る説明は實に利子と地代の社會倫理的是認を主張するものに外ならず、三要素説は謂はゞ有産者の利益に役立つものであるとコンラッドは斷定する。個人的利益の爲に經濟學説が主張されること程重き罪は無く、此誤りの爲に、經濟學の進歩は阻害され、經濟的知識の普及は妨げられ、其實際的應用は貧弱であるといふのである。

經濟學の進歩が妨げられた一つの例として、コンラッドは自由競爭の概念を取つて來る。自由競爭とは三つの生産要素が自由に競爭に參加すること、換言すれば契約及び營業の自由を意味すると一般に考へられるが、之は誤つた解釋であつて、土地や資本は、丁度それが生産や消費を行へぬのと同樣に競爭の出來るものでは無いのである。競爭するのは人間のみである。然かも土地や資本を所有せぬ勞働者は、地主又は企業家たる職業を選擇することが出來ぬのであつて、自由競爭の行はれる餘地は唯、勞働行爲のみに限られるものと言はねばならぬ。地主及び企業家たる職業は「競爭制限」の狀態の下に在ることに爲る。

コンラッドは競爭制限の種類を分けて四つとする、即ち自然的制限で、之は生産に必要なる手段の存在量が限られて居ることで、土地が其適例である。其二は法律的制限で特許權、版權の如きもの、其三は人爲的制限でカルテルやトラストが之に屬する。其四は實際的制限で、其競爭參加の爲に多大の資本を要する如きもので、競爭が實際上經濟的に特定能力者のみに限られて居る場合をいふ。此等の制限は現代に廣く擴つて居るのであつて、吾々は今日、自由競爭の時代よりも寧ろ競爭制限の時代に住むで居るのである。此競爭制限の事實を無視する三要素論は、今日も尙所得論をば統一的に説明することが出來ないで、その一つ〳〵に就て補綴作業を行つて居る有樣であり、就中利子論の如きは未だ殆ど全く之を解決して居らぬ。

コンラッドに據れば、自由競爭を想像し得る市場は勞働あるのみであつて、斯くの如き市場に於ては財貨の價格は其生産費用たる勞働の價格即ち賃銀と一致する。然るに生産に必要なる諸手段の供給が需要に比して稀少なる場合は、財貨の價格の騰貴を來たし、茲に勞働費用以上の利得の發生する餘地が生じて來る、此利得は即ちコンラッドの所謂る賃子（Rente）である。土地の地代や資本の利子は實に、此不勞所得たる賃子に外ならぬのである。

發生は唯〻單に競爭制限といふ事實に基くものなのである。

コンラッドは之に續いて交換平衡の問題即ち價格機構の構成に就て論じて居るが、之に關する説明は彼の大著「Der Mechanismus der Verkehrswirtschaft」の一應の理解を必要とするが故に茲には之を省略する。最後に彼は經濟學の權威の冒瀆者並に經濟理論的知識の普及の阻害者としての三要素説に就て簡單な欠點を指摘する。即ち從來の經濟學が現實の經濟現象の説明に殆ど全く無能であること、理論と現實の間に殆ど一致の見られぬこと、更に又三要素説が給付は報償を得るといふ給付原則を採用すること、勞働をも土地や資本と同格化する所の機械的經濟觀を唱導すること等を論ずる。此等の事情が經濟學の發達を妨げ其權威を冒瀆して居るといふのである。例へばマルクスの學説が其幾多の欠點にも拘らず驚嘆すべき普及の程度に達して居るのは、コンラッドに依れば現實を深く理解し、給付原則に反對して國民大衆の間に多大の興味を與へたからに外ならぬといふ。

コンラッドの斯樣な主張は本書に於て始て稱へられたものでは無く、一九〇九年に「勞銀と賃子」（Lohn und Rente）を著して以來、一九一二年の「價格論の基礎としての主觀的價値論」（Die Lehre vom Subjectiven Wert als Grundlage der Preistheorie）や曩に擧げた交換經濟の機構（一九三一年）等に於て反覆主張せられ來たつた所である。彼の眞意を理解する爲には其故に此等の著書を讀む必要があるが、併し此小冊子に於て其大體の傾向を窺知することが出來る。

所で、彼の新説は果して現代の理論的混亂を解決する路を開拓するものであらうか。

此書に依つて察するならば彼自身の主張は大體に於て正當なものと考へられる樣である。が同時に生産三要素説がそれ程非難せらる可きものか何うかも疑はしいと思はれる。生産を實行するとか經濟を行ふといふ意味に於て人間が經濟の主體であるには相違ないが、生産に必要なる根本的要素として土地並に資本が勞働と相並んで必要不可欠であることはコンラッド自身も亦認める所である。地代や利子が犧牲に對する報酬でなく稀少性に基く價格であるといふことも亦コンラッドの新説とは言ひ難く、例へば現代ではカッセル其他の人々に依つて既に説かれて居る。コンラッドの言ふ競爭制限は一見新奇の學説と思はれるかも知れないが、彼のいふ競爭制限とは畢竟供給制限を意味するものゝ如くである。地代や利子が土地や資本の競爭制限に基いて發生すると考へることから推察すれば、彼の此新語は必しも新説を意味せぬものゝ如くである。斯く觀じ來れば、生産三要素説が價格を以て報酬と考へた點に於て有産者の利益の爲にする所が在つたには相違ないが、それだからと言つて其爲に經濟學の進歩が果して彼のいふ程阻害されたかは疑問である。從つて又彼の新説が斯學の紛爭解決に有效であるか何うかも頗る怪しいと言はねばならぬ。（O. Conrad; Die Todsünde der Nationalökonomie, 1934, Leipzig u. Wien）